



## Mockingbird・コウノトリ・『アラバマ物語』



佐藤 紘彰

マンハッタンはチェルシーの南端の通りのビル、その12階のほくのアパートは、幸い北空に窓が向き、通り向かいの北隣のビルの屋上と同じ高さにある。その屋上庭園の木々のてっぺんに、朝になると夫婦らしい mockingbirds が別々によくとまって辺りを睥睨する。でなければ、近くをひらひら飛び回って互いを追う。

## ヘラジカは moose

このことを、北九州八幡の姪の寿美子に email で話したら、「マネシツグミは、生涯にわたってつがいの関係を保ち続ける…と書いてあるので、夫婦で隣のビルに越してきたのでしょうか。そんな可愛い鳴きまね鳥の声が聞けるとは、うらやましい」と言ってきたので驚いた。mockingbird は日本にはいないと決めて、日本語名など考えたことがなかったのだ。

思えば、日本に存在しなくても日本名のある動物はいくらでもある。北極熊、象、虎などなど。また、蜂鳥、ナマケモノ。そういえば、この春も moose のことを寿美子に書き送ったら、「ヘラジカ」と返ってきていた。

また、ハシビロコウという。なんだろう、と見たら英語で shoebill と呼ぶ鳥。嘴がどたりとした靴のようだから英語でそう呼ばれることはあきらだが、もちろんこの大きな鳥はアフリカの一部に住んでいてイギリスにもアメリカにもいない。

## 鷹狩りのコウノトリ

ハシビロコウの漢字をみると「嘴広鶴」。この「鶴」はコウノトリ。コウノトリは日本では江戸時代の終わりまではあちこちにいたが、明治以後激減し、戦後直後までは絶滅近く追い込まれた。それに応じて、その繁殖増加に努力がなされるようになったという。ほくも、二、三年前、兵庫の

どこかで飼育したコウノトリを放つ式典ともいべきものの記録映画を見たことがある。

コウノトリといえば、太田牛一の名著『信長公記』を思い出す。信長は鷹狩（「鷹野」と呼んだ）を好んだのでそれが頻繁に出てくる。そしてその威名が広がるとともに各地から各種の鷹を献上するようになった。なかで、明智光秀に暗殺される二年前の天正八年（1580年）の三月九日の記入は変わっている。いわく、

「北条氏政より御鷹十三足上せられ、

一、鴻取、一、鶴取、

一、真那鶴取、一、乱取と申してこれあり。」

「鴻」は「こうのとりの」と脚注にある。「真那鶴」はいま「真鶴」と書くのだろうが、このように献上する鷹が主に狙う鶴の種類に分けて送りつけるのは珍しい。

ここで気づく。信長の（そして江戸時代末までの）鷹狩で主な対象としたのは鶴や雁など、鷹よりひとまわり大きな鳥だったことだ。これは他の国では珍しいのではないかと思う。そのためではないだろうが、牛一は『公記』の首巻に、信長の居城清洲城の近くに住む天沢という沙門に武田信玄がいろいろ聞き出すところを設けて信長の鷹野を詳しく描く。まず「六人衆」をあげ、うち「弓三張」（一人は他ならぬ牛一）と「鎗三本」、といった具合である。つまり、単に鷹を手から放して小動物を狙うのと異なり、大掛かりな狩猟だった。

ついでながら、信長が「人生五十年、下天のうちにくらぶれば夢幻のごとくなり」と謡いながら舞うのを好むというのは、信玄が信長の「数寄」は何かという問いに天沢が応える部分にある。

それから百年ほど経った貞享元年、芭蕉が興行

した連歌は「霜月や鶴のイタならびゐて」と始まる。「鶴」は「カウ」, 「イタ」は「つくつく」と読む。発句は荷兮。脇は芭蕉, 「冬の朝日のあはれなりけり」。題は「田家眺望」。

## ヴァイニング夫人

mockingbird に戻ると、これはもともとアメリカ南部の小鳥で、1930年半ばまではその北限はノースカロライナの Chapel Hill くらいだった、と記したのは Elizabeth Gray Vining だった。ヴァイニングは、アジア太平洋戦争に大敗した日本に間もなく皇太子明仁の英語の教師として招かれ、学習院でも教えた人。ほくは1952年に出したその『Windows for the Crown Prince 皇太子の窓』にいたく感心したが、夫人はノースカロライナ大学 Chapel Hill 校で司書を勤めたこともあり、子供向きの本を含め多数の著作がある。mockingbird の北限云々を書いていたのはその自伝だったと思う。

二、三十年前、まだなんでもかでも温暖化／気候変化のせいにする前だったろうが、小鳥の生息地が北へ広がったのはハイウェイの北への拡大のせいという記事を New York Times 紙で読んだのを思い出す。ほくのマンハッタン二番目のアパートは裏庭に向かって大きな出窓があり、餌箱をそこからつきだしたせいもあろう、たくさんの小鳥が来た。中でその囀りが際立ったのは house finch/purple finch だった。finch は日本語で探すとヒワ、アトリ科の鳥などとある。

ただ、その裏庭で mockingbird は見た記憶はない。マンハッタンでこの小鳥に気づき始めたのは、現在のアパートに移った1987年以降のことだ。しかし、その姿を初めて見、その囀りを初めて聞いて驚いたのは、ノースカロライナの Sunset Beach で夏休みに行き始めた時だったから1990年以降になる。

Sunset Beach は barrier island にあって、その名物はなんといっても brown pelicans の艦隊滑

走飛行だろうが、借りた詩人 Grace Gibson さんの夏の別荘は三階からなる大きな家で、道の向こうの家並みに沿う電線にとまって、大声でいろいろの小鳥の鳴き声を再現する小鳥がいた。それが mockingbird だった。この小鳥は平均寿命8年、一生に200種類の鳴き声を習得するという。その鳴き声あるいは囀りは「真似る mimic」のか「嘲笑う mock」のか。それを決めるにはコーネル大学のオンライン・サイト All About Birds で聴くのがよい。

## 「mockingbird を撃つのは罪」

さて、mockingbird と聞いて Harper Lee の1960年の名作『To Kill a Mockingbird』(二年後映画化)を思う人は多いだろう。

小説の主人公 Atticus Finch は白人弁護士、白人女性から強姦で訴えられた黒人男性を弁護するが、無実の黒人は有罪となる。時代は大恐慌の1930年代の半ば。この話を語るのは娘の Jean (あだ名は Scout)。作者が育ったアラバマ州の小さな町の事件を反映しているという。だから Lee は初めに考えた題には Atticus もあったというが、結局選んだこの題は何を意味するのか。諺なのか。これは多くのアメリカ人が持つ疑問らしいが、小説には次のようなくだりがある。

Atticus がクリスマス・プレゼントとして空気銃を子供達にやりながら、「bluejays はいくらでも撃っても構わないが、mockingbird を殺すのは罪だ」と言う。Scout はカケスならいいがマネシツグミはダメというこの言葉に混乱して、隣のおばさんに尋ねると、「それは mockingbird が精一杯に歌って人間を楽しませてくれるからです」と説明してくれる。ただし、これが象徴的に誰を指すのかは意見が分かれる。

この本の題は日本では『アラバマ物語』と訳されたので、mockingbird との連想はないかもしれない。

さとう ひろあき 翻訳家, コラムニスト在 NY